

第13回年次大会の報告

ワークショップ
分科会発表報告書
2020年度総会報告

『新しい生活様式とコミュニティ ——いまここで問われるコミ福力！』

1) はじめに

本年度は、「新しい生活様式とコミュニティ——いまここで問われるコミ福力！」をテーマに、卒業生・在校生によるワークショップを開催しました。卒業生・在校生によるワークショップは、2020年度の「まなびあい大会」（第12回）に続き2回目の試みになります。

ただし、本年度は、コロナウィルスの感染拡大を予防するために、オンライン（zoom）での開催となり、それゆえに挑戦的な回となりました。そもそも、オンラインでの開催は、参加者同士の関わりがすべてカメラ／マイク／モニター／データに媒介されることとなり、参加者（在校生・卒業生・教員等）は、空間の共有（共在）から疎外された形とならざるをえませんでした。

しかしながら他方で、実際にオンライン開催にしてみると、移動のコスト（移動に伴う時間、経済的負担、心理的・身体的負担等）を下げることができ、それにより参加（遠方からの参加／隙間時間を使っての参加等）が容易になるというメリットがありました。また、コロナウィルスに関するテーマ（コロナ禍で仕事や学業を取り巻く環境がどのような影響が出ているか、その際、コミ福での学びはどのように活かされているか等）を通じて、そしてまたこのテーマだからこそ、卒業生・在校生・教員が「コミュニティ福祉学部での学び」と「現在の生き難さ／学び難さ」を改めて見つめ／捉え返す機会を得られたように思います。

以上の意味で、本年度のワークショップは、コミ福に関わる人びとが、コロナウィルスにより断ち切れ、同じくコロナウィルスにより新たなかたちで結び直されるというプロセスそのものであったと言えます。以下、ワークショップ当日の様子——「結び直され」ながら「まなびあう」プロセスの様子をご紹介します。

（2020年度副事務局長：三宅 雄大）

2) 各会場の様子

〈会場①〉

【講師紹介】

桑原 涼 氏

2020年、コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科卒業。学部生時代は藤

井敦史教授のもと若者の貧困を研究し、障害児放課後デイサービスでアルバイトを経験。サークルはIVYFesta実行委員会に所属。2020年、流山市役所に入庁し、障害支援課に配属される。精神障害者のケースワーク業務を担当。

山田 安里沙 氏

2014年、株式会社ツムラ入社、医薬営業本部東京支店配属。2014年～2018年3月まで、担当エリアにおいて医薬品の情報提供活動を行う。2018年4月、医薬営業本部流通企画部に異動、医薬品の流通業務に携わり、代理店社長会の運営を担当。人々の健康により直接的に関わりたいと思い、大学進学を決意して、2019年3月、同社を退職。2019年4月、千葉大学看護学部看護学科入学。現在、同大学2年生として在学中。

【司会】

安部 温代（2010年コミュニティ政策学科卒業／コミュニティ福祉学部インターンシップ・キャリア支援室 教育研究コーディネーター／まなびあい運営委員）

【講師の話】

安部 第1会場のワークショップを始めます。司会を担当します、安部と申します。よろしく申し上げます。

一同 申し上げます。

安部 先ほど藤井先生ご紹介してくださったとおり、私はコミュニティ政策学科の1期生です。卒論は藤井先生に大変お世話になりました。早速ですが、本日は記録のために録画をします。これは次年度の『まなびあい』冊子で報告するため、音声以外の録画データは必ず破棄しますのでご安心ください。また、ワークショップに事前申し込みをしていない方も、ビデオをオンにして気軽にコミュニケーションをとっていただければ、と思います。

さて、このワークショップのテーマは、「新しい生活様式とコミュニティ——いまここで問われるコミ福力！」です。コロナ禍において、仕事や大学での学びを取り巻く環境にさまざまな変化、影響が生じています。卒業生の方々は、コミ福での学びをどのように生かしていますか。そういったことをいろいろとお聞きしながら、この会場の在學生、卒業生、先生方全員で語り合い、それぞれの考えを深めていくことを目的としています。前半は40分間程度、今回講師役をお引き受けくださった卒業生ゲスト2名のお話を伺います。その後、後半に1時間ほど参加者の皆さんとワークショップを行います。この会場では山口先生にタイム

キーパー役をご担当いただきます。山口先生にお力添えいただきながら、アットホームに進めていければ幸いです。

最後に一つお願いがあります。卒業生や同級生の方、先生方のお話を聞いて、「素敵だな」「なるほど」といったことを感じた方は、ぜひZoomの反応ボタンでマークを押してリアクションしてください。よろしくお祈りします。では、卒業生ゲストの方々にお一人15分間程度で、簡単な自己紹介と、コロナ禍で仕事や学業を取り巻く環境にどのような影響が出ているか、そしてコミ福での学びがどのように生かされているかなどについてお話しいただきたいと思います。桑原さん、山田さんの順にお話してください。

桑原 はい。

安部 楽しみながらお話しただけると嬉しいです。では、よろしくお祈りします。

桑原 桑原涼と申します。4月から千葉県にある流山市の市役所の職員として今働いています。まだ右も左も分からない中で、先輩方にご指導をいただきながらお仕事をしています。

学生時代はIVYFesta実行委員会に所属していました。ゼミでは、若者支援を行うNPO団体について研究し、そこでの学びが公務員を目指すきっかけとなりました。

僕は今、障害者支援課という課に配属されていて、精神疾患を患う方々のケースワーカーをしています。幻覚や幻聴が起こってしまう統合失調症の方や、うつ病の方、高次脳機能障害の方と、様々な疾患を患われている方々がお客さんです。内容としては、障害者手帳の申請交付事務などの細々とした事務のほかに、働きたい、家事ができるようになりたいといった方のための、障害福祉サービスの利用までのサポート、などがあります。地域には、事故に遭って記憶障害になってしまった方の家族や、職場でのトラウマから仕事を辞めてしまった方など、様々な困難を抱えている方々がおり、その方々が少しでも前を向いて地域で生活ができるよう日々業務に取り組んでいます。

コロナ禍の仕事への影響という点、例年だと入庁して2週間ほど行われる新規採用職員の研修が2日にまとめられたことが挙げられます。入庁して3日目にはそれぞれの配属課に振り分けられ課での仕事が始まったので、今現在でも同期の職員のことをよく知らない状況なので、その点は少し残念だなと感じております。

障害者支援課でのコロナの影響だと、外出して他の人に移してしまったらどうしようという気持ちが強い方からの相談など、コロナ関係の案件を受けるときに

影響を感じます。障害者支援課には少なからずコロナの影響はあると思います。

コミ福での学びがどのように生かされているかについてですが、ゼミで若者支援をしているNPO団体について研究をし、その時の学びが現在の業務、主に窓口でのお客さんからの問い合わせや、実際に利用者に支援する事業所と連携を図る時に生かされていると感じます。若者支援の事業を行うためには、行政からの助成が必要なケースが多く存在します。ゼミでは、利用者のニーズに応えるためには、事業所との協働が重要で、そのためには中間支援組織である行政が間に入り、双方にとって最適な環境の調整を行うことが求められていることを学びました。その学びを生かし、利用者に寄り添った対応、事業所が求めているサポートを考え、先輩職員に相談させていただきながら日々業務に取り組むことができています。これまでの半年間で1番やりがいを感じた仕事は、流山市内の障害者就労施設の一覧パンフレットを作成したことです。このパンフレットがあることにより、事業所の仕事内容などを一覧で閲覧できるため、利用を希望する方の手間を省き希望しない業務での就労をするといったミスマッチを事前に防ぐことができ、まさに利用者と事業所の中間的な仕事だと思い積極的に取り組むことができました。

今個人的に興味があるのが農福連携という分野です。流山では現在特に農福連携で何か施策があるわけではないので、積極的に学び、何か実現に移せたらと思うので勤務以外の時間の勉強も大切にして、市の発展に少しでも貢献するのが現在の目標です。大学生の皆さんには、今しかできないこと、コミ福だからできることに挑戦して、コロナ禍でも悔いのない学生生活を送って欲しいです。ありがとうございました。

山田 まず始めに、簡単に自己紹介をさせていただけたらなと思います。私は、2014年にコミュニティ政策学科を卒業しました。大学生生活を振り返ってみますと、学業においては、国際開発や海外に関心を持ち取り組んでおりました。1年生のときには、カンボジアへのボランティア活動に参加したり、インターンシップでは国際NGOに行かせていただきました。ここに掲載している写真は、国際NGOでのインターンシップの時の写真です。私は、国際NGOのJENという団体に行かせて頂きました。活動内容は、グローバルフェスタという国際協力の活動を知ってもらうイベントにおいて、JENの活動を紹介する展示ブースのレイアウトや、当日の運営を任せていただいております。これは、その時の展示ブースの写真となっております。

また3年次の夏休みを利用して、アメリカのロサンゼルスにある語学学校に行きました。残念ながら今では、あまり英語が喋られなくなっていますが。サークル活動においては、新座キャンパスの人達限定のテニスサークルHEARTSに所

属し、大学生生活を送っておりました。

就職活動においては、人の命や健康に携われる仕事は、自分の中で一番やりがいがある仕事だなと感じていたので、そこを軸として就職活動を行っておりました。その中で、製薬会社も、薬を通して人々の健康に携われるということで、製薬会社も視野に入れて就職活動を行っておりました。縁あって株式会社ツムラに入社させていただきました。株式会社ツムラでは、製薬会社の営業である、MR(医療情報提供者)として活動をしておりました。最近のドラマで、『私の家政夫ナギサさん』見ていた方いますかね。その主人公だった多部未華子さんや瀬戸康史さんが演じられていたのが、このMRという仕事ですので、見た方いればイメージしやすいと思うのですが。主に医薬品の品質や安全性に関する情報提供活動を行います。担当エリアを持ち、医療機関に訪問して、自社医薬品の商品説明などを行っておりました。

そのような活動をしていく中で、私自身こんな思いが強くなっていきました。まず一つ目に、もっと直接的に人々の健康に携わりたいなという思いが強くなっていきました。就職活動において人の命や健康に携われる仕事をしたいという思いで活動をしており、製薬会社も薬を通して人々の健康に携われることができますが、直接、患者さんに関わることはできません。なので、先生とのお話から「この薬、患者さんに効いたよ」と言われるのがMRのやりがいではありますが、間接的であり、私自身もっと患者さんにより近く直接的に携わりたいなという思いが強くなっていきました。

二つ目が、女性としてのライフスタイルを考えるようになりました。女性は、27歳、28歳ぐらいに働き方について悩む時期が訪れると言われていています。私も仕事と結婚、出産を考えるようになった時に、MRの仕事は全国転勤であり、最近希望が通りやすくなっていますが、いつ自分がどこに配属になるか分からないという点があります。そんな中で、結婚や出産後も働きやすく、私が全国どこへ行っても、自分自身が働けるスキルを身に付けたいという思いが強くなっていきました。それらの思いから、看護師は患者さんに最も近い立場で接することができ、資格が持てるので、どこででも働けるという強みもあって大学進学を決意し、仕事をしながら受験勉強をしておりました。

今、現在、大学2年生として在学しております。今は、看護師と保健師の国家資格取得に向けて勉強しております。皆さん、多分、看護師はイメージしやすいと思うのですが、保健師も看護師の資格が必須の資格になります。看護師は病気になってしまった後の病院や在宅での「治療」を中心とした業務に携わるのに対し、保健師は病気になる前の「予防」を中心とした業務を行います。この二つの国家資格取得に向けて勉強に励んでいるところです。

学外活動としましては、写真を掲載させて頂きましたが、千葉大学医学部がポ

ランティアで開設している富士山7合目救護所にて、去年の夏に、医師のサポートをしながら救護活動をさせていただきました。また、企業や大学への健康診断のお手伝いをしております。

新型コロナウイルスの影響については、皆さんと同じように大学の授業に影響が出ておまして、授業形態が変更になりました。皆さんも同じような状態ですかね。対面授業とオンライン授業を組み合わせたハイブリッド型授業であり、対面・同時双方向・オンデマンドの三つが組み合わさった授業形態を取っております。しかし、看護技術はどうしてもオンライン上では習得が難しい技術があります。例えば、注射ですとか、そのようなどどうしても身に付けなければいけない技術の授業は対面授業になっており、それ以外はオンラインでの授業になっています。他に、2年生は9月に病院実習に行く予定でしたが、コロナの影響で中止になりました。その代わりに模擬実習として、教員の先生が設定された患者役になりきって実習を行いました。私たちの場合ですと、がん患者さんを対象に看護を行う設定だったので、先生ががん患者さんになりきり、看護技術を行いました。そのように、決められた時間にしか学校に行けないという制限もあり、また実際の患者さんに看護できないということからも、技術習得時間が例年よりも不十分であることが課題としてあります。

私、今、看護を学んでいますが、コミュニティ福祉学部の学びも看護と通ずるところがあると感じています。実際に生かされているかと聞かれると難しいのですが、同じような考え方をしているなと感じたことについて紹介したいと思います。

まず、一つ目ですが、考え方においてです。これはコミュニティ政策学科でも学んだ考え方なのですが、「一方的な援助ではなく、自立支援が大切だ」という考えが看護と福祉どちらも通ずるところであると感じています。印象に残っているのが、社会開発論での授業の内容です。発展途上国において、井戸を作るボランティア活動がされているという話がありました。それは発展途上国において、不衛生な水が原因で健康障害が起きていたり、子供達が遠いところまで水を汲みに行くため学校に行けなかったりするため、善意で行われている活動でした。しかし、井戸を作っただけで終わりでは不十分であり、現地の人たちが自分たちで井戸の適切な管理ができないと、井戸は老朽化し、使えなくなってしまうということで、現地の人たちが自分たちで管理できる仕組みを作ることが大切であり、そこから自立支援が大切であるという話を学びました。

これは看護でも全く同じです。認知症の患者さんに対して、例えば、物忘れが多くて、買い物に1人で行けないので、看護師が代わりに買い物行き、できないことやってあげるといえるのでは、その人のためになりません。その人が買い物に自分で行けるようにすること、例えば、買い物に行く前に、買いたいものをメモ

して買い物に行くのはどうですかと提案するなど、その人の主体性を尊重して、自分でできるような支援をすることが大切だと看護で学んでいます。そこは、福祉も看護も共通する部分だなと感じています。

次に、保健師と福祉についてなんですが、保健師と福祉はすごく密接に関わっています。先ほど、保健師は病気を予防する活動を行うと説明しました。保健師の中で、行政機関で働いている保健師を行政保健師といい、地域で人々の健康を守る活動をしています。コミュニティ政策学科にて、社会問題に対してコミュニティ全体での問題解決の仕組みづくりやネットワークづくりを学びましたけれども、保健師は医療専門職として、健康問題に焦点を当てて地域での問題解決の仕組みづくりができるように医療と福祉が連携して行うことが大切だと学んでいます。そのためコミュニティ政策学科で学んだ仕組みづくりの学びは保健師も同様に大切であると感じております。

また、地域包括ケアシステムって皆さん、学ばれていますよね。聞いたことありますか？超高齢社会である日本において、地域包括ケアシステムが推進されていますよね。高齢者が重度な要介護状態においても、住み慣れた地域で、人生の最後まで自分らしい暮らしを続けられるように医療や介護、福祉が一体となり、提供される体制や仕組みづくりです。そのため地域において、福祉と医療の連携は今後益々求められています。そのようなことから、保健師を勉強するにあたり、福祉の知識も重要となっています。ですので、今日、皆さんと福祉について学びを深められたらいいなと思っていますので、ぜひこれから活発に意見交換ができれば嬉しいです。以上で私の発表を終わりにします。ご清聴ありがとうございました。

安部 桑原さん、山田さん、ありがとうございました。

【ワークショップ報告：対話で広げる「コミ福力」の生かし方】

第1会場には卒業生ゲストの山田安里沙さん、桑原涼さんに加え卒業生1名、在学生5名（3年生3名、4年生2名）、教職員4名が参加し、さまざまな角度から語り合った。コロナ禍ゆえ同じ空間に集うことは叶わなかったが、当日を振り返ると、会場全体に「今できることをできる限り挑戦してみよう！」という共通認識が存在していたように思われる。

Zoomのチャット機能を活用し、「コロナ禍で仕事や学業を取り巻く環境にどのような影響が出ているか」「その影響に対して、コミ福での学びはどのように生かされているか」というトピックについて各人が書き込み、順に説明し、自由に意見を交わしていく。さらに対話の中で生まれたキーワードを見つめ直し、今私たちが考える「コミ福力」とは何かを言語化する——実に濃密な一時間であった。

また、奇しくも第1会場に参加された卒業生は公務員、看護学部生と、いずれもコロナ禍において一層存在価値が高まっているエッセンシャルワーカーの方々であったため、障害者支援、生活保護、医療など、福祉の現場で今何が起きているかを改めて理解し合う場となった。

在学生からはコロナ禍で「心が不安定になってしまった」という実体験や、「物理的にはなかなか会えない人達と講習などで出会えるのは嬉しい」といったオンラインだからこそ得たものに関する声が上がった。最後に、教員の「社会的排除問題が進みやすくなっている状況の中で、コミュニティをどうやって再生していかれるかが問われている」という問題提起から、「コミ福力」を備えた私たちが今こそ取り組むべきことについて整理していった(図1)。

今回のワークショップは、参加者全員にとってリアル・オンラインを問わず“対話できる居場所”の重要性を再確認する機会となったのではないか。中原・長岡(2009)は、「対話」を以下のように定義している。

- ①共有可能なゆるやかなテーマのもとで
- ②聞き手と話し手で担われる
- ③創造的なコミュニケーション行為

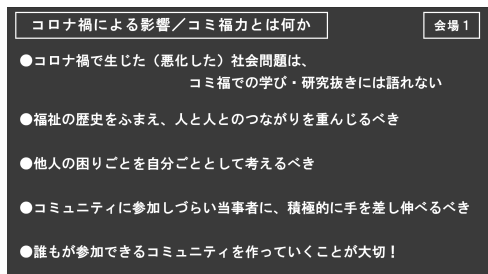


図1

コミュニティ福祉学部で培った力、福祉マインドをどのように現代社会に生かしていくべきか。「まなびあい」におけるワークショップは2019年度より開始されたが、ワークショップに限らず「まなびあい」が在学生、卒業生、教職員が緩やかな紐帯でつながり、本気で対話できる場であり続けていくことを期待している。

【参考文献】

中原 淳・長岡 健(2009)『ダイアローグ 対話する組織』ダイヤモンド社。

(安部 温代 2010年コミュニティ政策学科卒業/コミュニティ福祉学部インターンシップ・キャリア支援室 教育研究コーディネーター/まなびあい運営委員)

〈会場②〉

【講師紹介】

佐藤 めぐみ 氏

2010年コミュニティ福祉学部福祉学科卒業。在学中は、「児童・女性・家族」分野を深く学ぶ湯澤直美教授のゼミに所属。実習で出会った利用者の方、職員から大切な気づきを頂き、現場に出ることを決意。新卒で都内児童養護施設に勤務、8年間従事。児童養護施設にて里親制度の重要性を考え、現在は東京都里親支援機関にて勤務。

新谷 健介 氏

2013年、コミュニティ福祉学研究科コミュニティ福祉学専攻博士課程前期課程修了。在学中は体育会ボート部に所属。学部では、児童・女性福祉を専攻。大学院では、健康心理学を専攻。大学院進学直前に、東日本大震災が発生したこともあり、コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援推進室の運営にも携わる。卒業後、新卒で星野リゾートに入社。現場で5年間働いた後、現在は同社の情報システム部にて、システムメンテナンスや開業事業を主に担当。

山内 沙織 氏

2014年コミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科卒業。2014年、株式会社ルネサンスへ就職。2017年3月まで、野田市の店舗でスイミングコーチ業務を経験。2017年4月～2019年3月まで、地域健康営業企画部に所属。全国の自治体への健康づくり事業の支援と宿泊型健康づくり事業に携わる。2019年4月から健康経営推進部に所属。企業向け健康づくり事業の納品に関わる仕組みづくりを担当。2020年4月からヘルスケア研究開発部に所属し、引き続き企業向け健康づくり事業の納品に関わる仕組みづくりを担当。

【司会】

大川 真央（コミュニティ福祉学部コミュニティ福祉学科2004年卒業／まなびあい運営委員）

【講師の話】

大川 このワークショップの司会を担当します、卒業生の大川といいます。よろしくお願ひします。本日は記録のために録画をしています。次年度のまなびあいの冊子に、文字として様子を報告するために、音声以外の録画は破棄をします。事前申し込みされた参加者の方は、オーディエンスの方と区別するために、お名前に冒頭に、星印を付けていただいているかと思ひます。このワークショップの

テーマは、『新しい生活様式とコミュニティ—いまここで問われるコミ福力!』ということで、皆さんには、コロナ禍で、仕事や学業を取り巻く環境が、どんなふうに影響が出ているのでしょうか。またコミ福での学びが、どんなふうに活かされているのでしょうかということをお話しいただきたいと思っています。そこで卒業生の話ですとか、現役学生の皆さんとの話し合いで、それぞれの考えを深めていくことができたらと思っています。

最初の40分間ぐらいで。卒業生、ゲストにお招きしてる講師の皆さんに、この会場では3名いらっしゃると思いますが、3名の卒業生の方に、大体10分ぐらい、お話をいただいて、その後、参加者の皆さんと、交流のワークショップを1時間ぐらい行えたらと思っています。よろしくお願ひします。それでは、今、卒業生のゲストの皆さんに、ここが3人いらっしゃるということで、10分ちょっとぐらいで自己紹介と、先ほども言った、コロナ禍でのお仕事等に、取り巻く環境にどんな影響が出るか、コミ福での学びが、どんなふうに活かされているかについて、ぜひ、お話をいただきたいと思っています。

まず、お1人目は、佐藤さんから、お願ひできればと思います。よろしくお願ひします。

佐藤 よろしくお願ひします。新谷君、久しぶりです。

新谷 お久しぶりです。

佐藤 画面共有させていただきたい、パワポの資料、簡単に作ったので、そちらに出させていただきますても大丈夫でしょうか。これ、動きますかね。動かないかな。パワポの画面で動いて見えてますでしょうか。

大川 問題ないです。

佐藤 ありがとうございます。始めに、自己紹介させていただければと思います。2010年福祉学科卒です。卒業後は児童養護施設で8年間勤務していました。その後、今、所属している東京都の里親支援機関という機関が、東京都ですと三つありまして、そのうちの一つの、NPO法人、キーアセットに、従事しています。学生時代は、きょう発表者でもある、新谷さんと同じ、湯澤ゼミに所属していました。その中で非常に貴重な経験をさせていただきたくなので人生の中で一回、施設で働いてみようかな…思ったところ、そのまま、結局、8年間ですが同じところに勤めていました。その中で、里親家庭の必要性をすごく感じたので、東京都の里親支援機関に、ご縁もあっている状況です。まさか、こんなに自分が福祉

カラーというか、コミ福卒、コミ福カラーでいくとは思ってなかった部分もありますが、あつという間にといい感じですか。

事前に大学の方と打ち合わせしたときに、今回のコロナ禍のところと聞いており、ちょっと触れたいと思っているんですが、せっかくコミ福の学生さんが、集まっていられちゃうと思うので、里親制度について、私のほうから、お伝えさせていただければと思っています。皆さん、授業等で学ばれている方もいるかと思うんですけども、私が所属しているキアセットという里親支援機関は、大本がイギリスになります。やっぱり、ヨーロッパとかのほうが、日本に比べて、里親委託率、里親登録、施設養護じゃなく里親養護の感覚が浸透していて、一般的、メジャーなものになっています。

そもそも、里親制度に関して、簡単にお伝えしたいと思うんですが、社会的養護というものが、言葉としては、皆さん、聞きなじみもあるかな、どうかなってところなんですけれども、施設で暮らしている子や、家庭で暮らしているお子さんたちのことを、指している言葉です。全国に約4万6,000人いるといわれていますが、実際、これは、保護されている子どもたちの数になっているので、実際は、もうちょっと、困っている子の数で言えば、実際数、多いのかなと思っています。施設養護っていうのが、日本の中では主流ですけども、施設養護じゃなくて、家庭的な養育をしてほしいねっていうのが、里親制度になっています。先ほど、申し上げたみたいに、日本では児童養護施設とか、自立援助ホームとか、施設でのケアが中心となっていて、家庭的養護というのが、あまり伸びていない。日本の文化が、なかなか広めさせていけない部分、制度も不完全な部分等あるかなと思っています。

里親制度には、大きく分けて、養育家庭制度と養子縁組制度というものがあります。先ほど申し上げたみたいに、当法人の大本であるイギリスとか、あとオーストラリアとかだと、ほぼ里親家庭で、社会的養護の子どもたちの心身のケアというのは、なされているんですけども。アジアの中でも、特に日本は、里親制度、里親委託っていうのは、なかなか普及していないと思っています。養育家庭と養子縁組ということ、さっき伝えたかと思うんですけども、養子縁組っていうのは、戸籍上でも家族になるっていうもので、養育家庭は、施設担っている役割を家庭で行うことになるため、例としては実親さんとの交流とかもあったりします。

都で把握できている、社会的養護の子どもたちの数は約4,000人と言われていますがこれは先程も挙げたようにキャパシティとして見られ数。実情としてはこの数に入らない子どもたちもいると思っていますが、定員としては、これぐらいになっていて、そのうち約18パーセントの子が、里親家庭の中でケアされています。子どもたちは、やっぱり、さまざまな課題を抱えざるを得なくて、こちら

に書いているような心や、愛着関係、かつ、私たちもそうだと思うんですけども、行きたい大学があるって思って、勉強したいと思っても、なかなか勉強に集中できないとか、先行きが見えない不安というものを、抱えている子どもたちがいます。

私が里親支援機関にいて、コロナ禍の、今回のテーマでもあるんですけども、思ったところは、家庭訪問がなかなかできなくなってしまった時期がありました。里親家庭さんは、家庭で子どもたちを見ているので、本来だったら、里親同士のサロン等で、横のつながりも大事にして、子どもたちの些細なこと等を話したりされています。その他、発達面で気に掛る話や、愛着障害、人間関係等一口ではまとめられないケアを、みんなで考えていくんですけども、そういった機会が、どうしても減少してしまったり子どもたち本人に関しても、どんなものを悩んでいるのか等ちょっとしたことを私たちも把握しにくくて、ケアが遅れてしまったりすることもありました。

余談ですが児童虐待の通報は学校が主だったんですけど、警察からの報告がここ半年くらいは多かった印象です。その中でも、性的虐待は、普段でも、ケアが遅れてしまったりするところもあるのですが、この期間はそういった相談が多かったとも聞いています。

私自身はコロナ禍での生活も通常モードに戻りつつあります。家庭訪問のときも、アルコール消毒を、常に持っていたり、訪問人数は減らしたり等、できる限りの対策を取りながら、緊急事態宣言が明けてからは平常運転に戻っています。もう業務自体は再開しているので、外食も換気しているお店や、一人で行ったりなどはしつつさせてもらうこともあります。

最後にコミ福で私が学んだことを振り返ったときに、社会でこれまでどう生かされたかなと思うと、リモートもこうやってやれる時代だからこそ、「思いやり」をもっていきたいと改めて感じています。相談援助の仕事は、やっぱり肌身で行える部分も多くあって、対面で会ってお話することもすごく重要になってくるのが、できなくなっちゃうこの現状が、もどかしいなどは思ってるんですけど。私のような職種に限らずこんな時代だからこそ、コミ福で学んできた感覚や気持ちなどは大切にしていってほしいと思っています。

今日のような機会に皆さんとお話する機会をいただくことで、世の中にはいろんな人がいて、いろんな環境が、それぞれあるということを、伝えさせていただけの機会は学生時代の学びも生かされてると思っています。あと、振り返ったときに、学生時代にしかできないことを、ゼミだったりもそうだし、サークルもそうだし、アルバイトもそうだと思うんですけど、本当に、今しかない時間だし、みなさんはこれから、まだまだ何でもできると思うので、自分でセーブするのではなくて、今、ちょっと大変な時代になっているかもしれないんですけども、

いろんな人脈を生かして、頑張っていってほしいと思っています。私からは、以上になります。この後、新谷君と山内さんの発表になるかと思います。ご清聴ありがとうございました。

大川 すみません。ありがとうございます。次、順番で新谷さん、よろしく願いします。

新谷 お願いします。素晴らしい発表だったんで、プレッシャーなんです。

佐藤 いえ。

新谷 パワーポイントあるので、共有させていただきたいと思います。これで、今、全画面で見えておりますでしょうか。

新谷 では、発表させていただきます。新谷健介と申します。最初のスライドを、飛ばしてしまったので、簡単に自己紹介すると、2007年にコミ福、福祉学科に入学し、2011年にそのまま卒業。2011年からコミュニティ福祉の大学院に進みまして、そこで、学んだ後に、星野リゾートという会社で働いております。就職している会社は、観光業界に近いような所ではあるんですが、コミ福を卒業して、役に立ったことが、たくさんあるので、そういったところを触れさせていただければと思っています。agendaとしては、こんな流れで。10分という短い時間なので、とんとん拍子に進んでいきたいと思っています。

まず、写真で自己紹介をしていくんですが、ボート部時代の写真。こんな感じで、体育会ボート部で活動していました。あと、相撲部に助っ人と呼ばれたこともあって、両国で、大学4年生のときに、相撲とりました。本当に、いろいろなことに挑戦するのが好きなので、こうやって、スカイダイビング、バンジージャンプ。あと、ダイビングのライセンス取って、海に潜りに行ったり。あとは、かっぱえびせんくわえて、カモメとキスしようとしたり。花魁の格好に挑戦してみたり。これは最近、同僚の結婚式があって、柏レイソルが、すごい好きな同僚だったんですけど、柏レイソルのマスコットのキャラクターの格好して、その結婚式に、ライスシャワーに、急ぎよ、参加するっていうことをやりました。ごめんなさい。変な人だっっていうのを、覚えて帰ってもらえれば、この発表は十分かなと思っています。

気持ちを切り替えて、真面目なところでいくと、学生時代から今の仕事に就くまで。なぜ、観光業界の星野リゾートに入ったかっていうと、きっかけは2011年3月にあった、東日本大震災になります。ちょうど大学を卒業して、大学院に進

学するときに、卒業式が中止になって、そのまま、卒業した気持ちが、なかなかない中、大学院に進学したんですが。その中でコミ福が立ち上げた、復興支援室のスタッフとして、学生と一緒に、月に1回、気仙沼大島っていう所へ、学習支援をしに行く活動を、主に行っていました。そこで、活動の拠点だったのが、旅館の明海荘さんという所なんですが、その旅館を経営するご夫婦が、本当に素晴らしい方たちで、こういった人が集まれる場所、そういうのをつくれる業界っていいなというところから、人に関わる仕事をしたいという気持ちもあったので、ホテル、旅館業界に興味を持ち、星野リゾートへ入社しました。現場で数年間、実際にサービススタッフとして働いていたんですが、30歳になったのを機に、新しいことに、やっぱりチャレンジしたくなって、今の情報システムに、昨年5月から異動しております。現場働いてたときには、こんな形で、ご当地サポーターということで、地元の魅力を発信するような役割を担っていました。

コロナの影響ってところを、大川さんに、お話ししてほしいということだったので、お伝えすると、観光業界、大打撃を受けておまして。代表をテレビ見ない日はないぐらい、テレビに出まくっているんですけど、稼働が9割落ち込んでいた時期もあったんですが、今は、GoToトラベルキャンペーンやマイクロツーリズムといったことが、盛り上がっているおかげで、だいぶ戻ってきています。私の仕事としては、開業施設にシステムを導入しに行くという仕事がありますので、来週は鹿児島に、12月は沖縄、1月以降もさまざまな所に行く予定が入ってきております。コロナの中でも、自分が前向きに頑張れた理由としては、代表が社内のブログというものを作っておまして、そこでニュースにもなっていたので、知っている方もいるかもしれないですが、倒産確率がいくつだよっていうのを、本当に数値に出してまして、それで落ち込むんじゃなく、この危機を、社員一丸となって乗り越えようっていうところと、明確な指針を出してくれたので、それを信じて、進むだけだったので、すごい迷うことなく、進んでこれたんだと思います。

コミ福で得られたこと、簡単にお話しすると、今の仕事が、現場、施設とエンジニアをつなぐパイプ役になっておまして、そこで、私の現場で働いていた経験が生きているんですが、それによって、より施設に役に立つようなシステム開発のお手伝いをさせていただいております。先ほども言ったように、開業予定の施設に行って、システムに関する現地スタッフへのレクチャーや、サポートなども行っています。いずれにしても、どんな仕事でもそうなんですが、人との関わり方やコミュニケーションの取り方が、すごい大事だになっていうのを感じていて、その礎をコミ福で学ぶことができたと思います。

コミ福を卒業して思うことなんですが、よく、コミ福は就職に不利だとか、コミ福が第1志望じゃなかったっていう人の話を、私が学部生のときも、いっぱい

いたというふうに思っているんですが、コミ福で何も学べていないかというのと、絶対そんなことはなくて、ないのは自信だけかなと思っております。コミ福で学んだことが、絶対に社会に出たときに役に立つということは、自信を持っていたきたいです。ただし、コミ福の人、みんな、本当にいい人がそろっているので、世の中には、そんなにいい人ばかりがないっていうのも、知っといたほうがいいかなっていう側面もありまして、世の中には、本当にいろんな人がいるっていうところは、覚えておいてください。

最後に、簡単なクイズをしたいと思うんですが、めちゃくちゃ簡単です。これはなんと読むのでしょうかというところなんですが、正解は、もちろん、私の名前、新谷と思ひ浮かんだ方もいるかもしれないんですが、実は、それが正解というわけではないんです。なんでかっていうと、その質問が出たときに、新谷に決まってるだろう。なんで違うのって思ったり。そういえば昔に、アラヤさんと言う人いたな。でも、この人は新谷だから、新谷なのかなって考えたり、どうせ新谷じゃないんだろうって、もう最初から、うがった目で見て、ほら、やっぱりと思っていても、もしかしたら、いるかもしれないです。こんな形で、よく色眼鏡だと例えられるんですけど、本当に一つの問いに対しても、同じように考える人っていうのは、ほとんどいなくて、幼少期の経験で、人は独自の価値観を構築しているといわれています。私自身も、その独自の価値観というのを持っていて、バイアス、偏見です。色眼鏡とかいわれるんですが、私は、そんな色眼鏡とかいうと、取り外せるようなイメージなんですけど、もっと角膜ぐらいに刻み込まれているものじゃないかなと。なかなか変えにくいものだと思います。

今、言ったように、自分が感じていることと全く同じように、相手も考えている、感じているなんてことはあり得ない。同時に、絶対に正しいということは、この世にないということは、きょう、皆さんにお伝えしたいと思っていて、例えば1足す1が2っていうのは、正しいって普通に考えると思うんですけど、それは、もともと1足す1は2にしないと、成り立たない世の中が、実は、できているからであって、昔の人がもし1足す1を100と唱えて、それが当たり前の世界になっていたら、私たちはと言われたときに、すごい抵抗感を覚えていた可能性があるっていうところがあります。

具体的な例で言うと、天動説と地動説が有名なんですが、昔は、宇宙のほうがか動いている。月は回ってないという説が正しいといわれていて、そこで地動説を唱えても、聖書に書かれていることに反対するなんて、何てことだということで、すごい迫害を受けたり、死刑になったりというお話があったように、本当に正しいということは絶対にないっていうところは、皆さんに、きょう、お伝えしたいと思います。

その、自分が独自に刻まれた価値観っていうのは、簡単に変えられないんだ、

どうすればいいかという、ここで私は、眼鏡を使えばいいというふうに思っ
まして。その上に掛ける眼鏡は、いくらでも自分で選ぶことができると思うので、
自分の価値観というのをしっかりと認識した上で、その上で、どんな眼鏡を掛け
ればいいのか考える。このシーンでは、こんな眼鏡掛けよう。自分の人生は、こん
な眼鏡を掛けていこうというところを選べると、より良い人生が、築けていける
んじゃないかと。そうやって、掛ける眼鏡を選べるようになると、自分の軸を持っ
て、生きていくことに、つながるのかなと考えてます。

私事なんですけど、今、コロナ禍で、ホテル業界、落ち込んでいたときに、仕
事の時間が減っていたので、キャリアコンサルタントの資格の勉強を始めていま
した。ここで、その資格を使って、人の相談役になることは、もともと多かった
ので、一つの施設だけじゃなくて、全社的に、そういった相談を受けられるよう
な、今、立ち上げたいなというふうに計画していて、人事の人と、相談を始めて
います。今日のこの会が、少しでも皆さんのお役に立てればと思っています。

山内 では、10分という短い時間ですが、お話をさせていただきます。よろしくお
願いいたします。私の簡単な自己紹介を、まずお話するんですけども、コミュ
ニティ福祉学部のスポーツウエルネス学科3期生で入学をしました、山内沙織と
申します。2010年に入学をして、2014年に卒業したんですけども、全部、基礎
演習は、加藤先生、卒業論文も、加藤先生というような、加藤先生に、お世話に
なりっぱなしな生徒でした。ただ、加藤先生だけっていうより、2年生のときは、
石井先生にお世話になり、3年生のときには、沼澤先生にお世話になっていたと
いうのが、学生時代です。なんで立教のこのスポーツウエルネスに入学したかと
いいますと、二つちょっと経験があり、一つ目が、父親が右半身、今、不随で、
脳卒中を患いました。そんな経験から、もっと運動の大切さを伝えていきたいな
ということ。もう一つの経験が、高校時代バスケットボール部に入ってたんです
が、ケガをして、選手からマネージャーに転向しました。そのときの、ものの見
方が変わって、スポーツを自分でやることだけじゃなくて、支える側も大事な
んだということから、立教大学のスポーツウエルネス学科で、学びたいと思って
入学をしたっていうのが背景になります。

卒業と同時に、もしかしたら、ご存じな方、少ないかもしれないんですけども、
健康運動指導士という資格がありまして、その資格を無事取得できました。
それを活かしながら、今、スポーツクラブのルネサンスという会社に入社しまし
て、7年目で勤務をしています。最初の3年間、スイミングコーチとして0歳
から90歳と、本当に、書いてあるとおりなんですけど、水泳の指導をさせていた
だいた後に、自治体向けだったりとか、企業向けの健康づくりの商品のサポート
だったり、社内の、今、仕組みづくりを担当しているんですけども、そんな業

務をしております。これが、簡単に写真になります。左側の丸印の所。アクアビクスの指導も担当していました。楽しそうに、お客さんと、エクササイズをしている写真になります。右側ですね。こちらが、岡山県に出張に行きまして、企業で働く人たちの、健康課題で悩んでいる会社さんも、今、多くなっていますので、そんな方たちを、自然あふれるところに宿泊させて、健康づくりのサポートをしたっていう商品の展開を行った写真になります。

こんなふうにして、健康づくりをサポートしているんですけども、簡単にルネサンスの自己紹介といえますか、こんな企業理念があるんです。『生きがい創造企業として』っていうところ、こんなところから、日々、私、お仕事しているんですけども、ルネサンスって皆さんご存じですか。聞いたことってありますか。多いですね。ありがとうございます。会員の方も、もしかしたら、いらっしゃるのですかね。ありがとうございます。スポーツクラブの会社なんですけれども、こんなふうにも多様な事業を展開しています。スポーツクラブの展開は、もちろん、さっき、私が携わっている担当の仕事が、この、企業保険者の健康づくりの支援、自治体の健康づくりの支援というところになってきます。こんなふうにも、スポーツクラブの会社と思われがちなんですけれども、実際に運営している店舗は、こんなにたくさん、実はあります。皆さんがよく想像するスポーツクラブって、この左側の、大きい写真なんじゃないかなと思ってのんですが、今は女性特化型のスタジオだったりとか、あとは、ジム・&・スタジオ型とって、シャワーなどがないような簡単にトレーニングができるような施設。短時間型とって、高い強度のプログラムを専門に行うようなスタジオも運営しております。

こんな施設展開をしてるんですが、コロナ禍で、どんな取り組みをしているのかってところになってきます。まず、スポーツクラブに来ているお客さまに対しては、皆さんもやっていただいているかと思うんですが、距離を保ったりとか、飛沫を防止するために、マスク着けましょうね、みたいな取り組みをしております。ただ、私たちは、スポーツクラブの来館されるお客さま以外にも、在宅勤務が多くなっているような課題でしたりとか、なかなか外出が難しいような課題に対して、オンラインレッスンのサービスを展開することにしていきます。左側が、個人のお客さまに向けたサービス。右側、たまたま、私がモデル写真になってるんですけど、右側は、法人向け、企業向けのオンラインのプログラムを展開し始めたというのが、今の取り組みになります。

ここまでが、簡単に会社の取り組みだったんですけども、じゃあ、私の取り組み、自分の仕事の取り組みって、どんなところなんだろうというところで、今はクラブに勤務をしているというよりは、社内でサポートをしている立場なので、在宅勤務が、主に推奨されるようになりました。今回みたいに、打ち合わせ、ミーティングは、もう、オンライン。業務がスムーズに進むように、携帯のチャット

でやりとりをする。急ぎのときは、電話もするんですけども、もちろん、社外の方とも、オンラインでやりとりするような状況です。加えて、右側が、それに対して、どんなふうな影響があったかというところになるんですが、電子化といって、資料がデータベース化されたりとか。今までは、打ち合わせをするときに、積極的に発言できないような性格だったものの、受け身だけだと、本当に、相手がどんなふうに、感じているのかが分からないというところで、積極的に発言をしたり、リアクションを取ったり、そんな心掛けが、自分の中でも進みました。最後、在宅勤務が多くなってきたので、通勤時間の短縮というところで、余暇時間が増えたので、健康づくりを取り組んでというものが、自分の中での影響だったり、取り組みになってきます。

そんな中で、コミ福の学び、どんなところだったのかなっていうところなんですけれども、皆さん、佐藤さんと新谷さんおっしゃっていただいたことと、ほぼ同じだなと思っておりまして、二つあります。まずは健康でいることの大切さ、これスポーツウェルネスの学びだと思うんですけども、栄養と休養と運動のバランスって、非常に、やっぱり大事で、バランスが取れていないと、人間の生活って豊かにできないなというところが一つ。そして、二つ目。人とのつながりを大事にすること。一期一会の出会いを大事にしたりとかお互いを支え合っていくことってというのが、学んできたことかなと感じておりまして、そんな中で、どんなふうに、つながっていくのかと考えたときに、健康でいることの大切さ。自分が健康だからこそ、やはり、仕事のパフォーマンスが上がるとか、それを相手に届けることができることにつながるってというのが、学んできたことの活かし方かなと感じております。

もう一つ、人とのつながりというところ、今、私も自分のチームだったり、部署だけで、お仕事をしているわけではなくて、やはり、初対面の方だったり、部署が違う方たちと、チームで仕事を進めていくことが非常に多いです。その中で、先ほどの、新谷さんの、色眼鏡の話じゃないですけども、同じような固定概念を持った人たちだったりとか、自分のこだわりとか、自分だけのもので、仕事ってなかなか進められないので、自分の中でも、人とのつながりを大事にしたりとか、多様性を尊重し合いながらっていうところが、非常に大事だなと感じていますので、そんなところが、これからの自分の中でも、つながっていくのかなってというのが、コミ福の学びへの活かし方になります。ここまで、ざっくりとして、話し10分で進めていきましたが、一緒につながっていければと思っております。

【ワークショップ報告】

第二会場では、卒業生ゲストの佐藤めぐみさん、新谷健介さん、山内沙織さんの3名とともに、現役学生・卒業生・教員が参加し、ワークショップを行った。

卒業生ゲストより、自己紹介とともに、コロナ禍で仕事や学業を取り巻く環境にどのように影響が出ているか、コミ福での学びはどのように活かされているか、を話して頂いた。

どのような経緯また思いでそれぞれの現場で今働いているのか、コロナ禍というこれまでにない状況で人との距離を意識しなければいけない現状での課題、ただそれを乗り越えて取り組んでいることを熱く語って下さり、まさにコミ福で培われた力を大いに感じさせてもらった。

卒業生ゲストの発表の後、会場内でも「コロナ禍で仕事や学業を取り巻く環境にどのような影響が出ているか」「その影響に対してコミ福での学びがどのように活かされているか」において参加者それぞれが考え感じるキーワードを書き出し、そこからさらに議論を深めていくというのがワークショップのお題ではあったが、フロアより、ぜひこのような場で、現役学生と卒業生が双方に聞いてみたいことを聞いていこうとの声があり、テーマをふまえつつも、自由に話し合う形となった。話された内容をうまく取りまとめることはできなかったが、ここに会した参加者それぞれの今ある状況での思いを一部でも共有し、そこからコミ福の力がしっかりと広がっていること、それらがさらにつながっていくことを実感する場になったと思う。

まなびあい学会1回目より参加しているが、まなびあいを通じて現役学生や卒業生の声を直接聞けることを楽しみにしており、毎回私自身もっと頑張らねばと奮起させる力をもらっている。今回は、同じ空間に集うのではなく、画面上に集う初めての方法であった。

様々な会合がリモート・オンラインという方法で開催されているが、私はその方法になかなか馴染めず、どこか疎外感を持ってしまう。ただ、物理的な距離があってもそれを超えて対話できる、時代の変化や環境に合わせて集う形を、今回のまなびあい、ワークショップで体感したように思う。どのような方法で対面するとしても、まなびあいが、今後もコミ福でのつながりを実感できる場であってほしいと改めて感じている。

(大川 真央 コミュニティ福祉学科2004年卒業/まなびあい運営委員)

〈会場③〉

【講師紹介】

富吉 貴浩 氏

2003年、コミュニティ福祉学部コミュニティ福祉学科卒業。コミュニティ福祉学部1期生。学生時代のサークルはアジア寺子屋に所属。電動車イスの方と行く定期的な旅行も開始。2学年終了時に休学し、1年間タイで過ごす。2003年、

株式会社ジェイティービー（現：株式会社JTB）に入社、10年間の学校営業の後、海外研修員としてJTBバンコク支店に駐在。2014年に帰国し、公益財団法人日本オリンピック委員会（JOC）に出向。JOCならびにオリンピック日本代表選手団の広報業務に従事。2017年、経営管理修士取得。2018年にJOCに転籍。

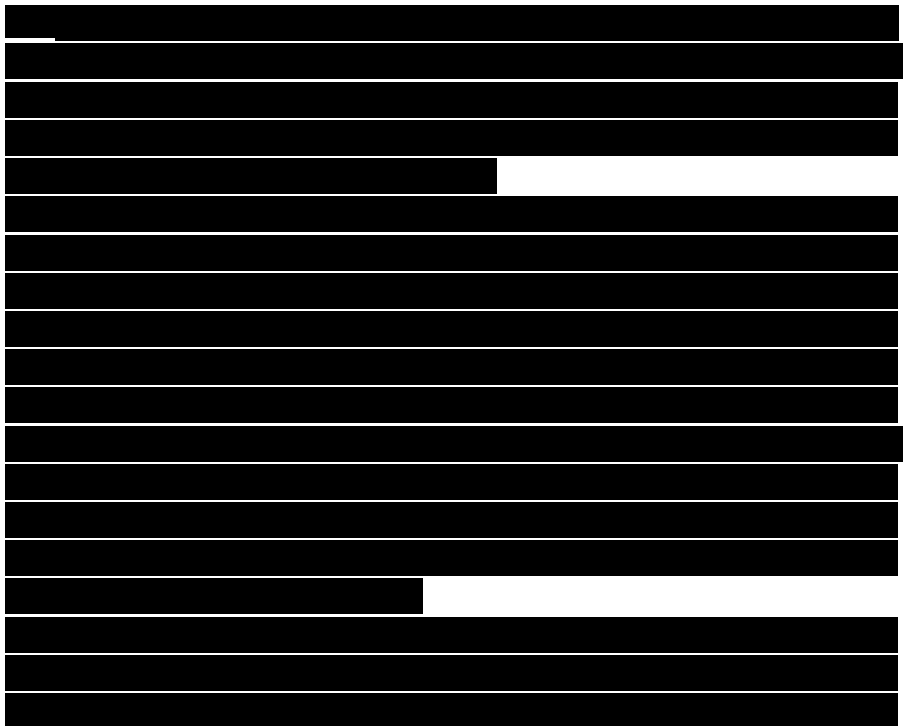
長沢 裕氏

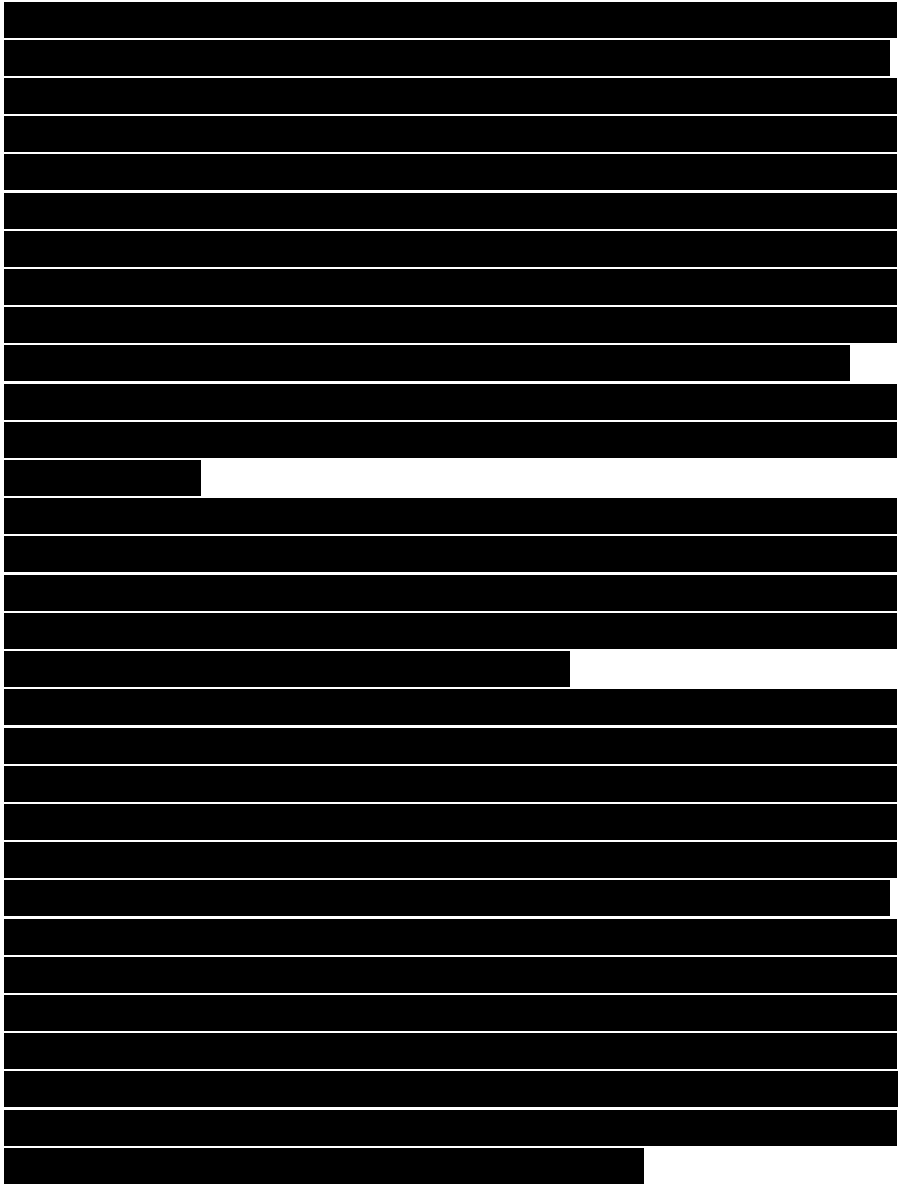
2017年、コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科卒業。大学4年時より、日本テレビ「ZIP！」の6代目お天気キャスター、ショウビズレポーターとして活躍。自然との繋がりが感じられる瞬間を多くの人と共有すべく園芸番組や釣り番組などにも出演する。地元福島では子供達と自然を味わうプログラムなど参画。

【司会】

坂田 拓朗（コミュニティ福祉学部コミュニティ福祉学科2002年卒業／まなびあい運営委員）

【講師の話】





長沢 まず画用紙に描いたものを見てもらいながら自己紹介をさせて頂きたいと思います。

平野 はい。

長沢 コミュニティ政策学科を2017年に卒業しました福島県伊達市出身の長沢裕と申します。私は大学2年生のときに実家が田舎なものですから、東京でしかできないことをしようと思って、WEBの求人でもエキストラに応募したのがきっかけで、そこから事務所に入りませんかというお話をいただき、大学2年のときに芸能事務所に入りました。

学生のときは特段、芸能活動は何もしていなかったのですが、大学4年生でちょうど就活を始めた時期ですね。大学4年の2月3月くらいでした。日本テレビの『ZIP!』の6代目お天気キャスターに決まって、その後約2年半、『ZIP!』に出演してショウビズレポーターなどを務めさせていただきました。また、大学4年の同じ時期にNHKの『趣味の園芸やさいの時間』という番組に受かりまして、杉浦太陽さんと一緒に4年間、太陽のベジ・ガーデンということで畑を耕しておりました。地元、福島放送の『ヨジデス』ですという情報番組に出演し、BS TBSの『釣り百景』という番組やBS11の『マイナビBe a booster!』というバスケの番組にも出演しています。その他には演技をやっていたりもします。

その他にもアンバサダーの仕事として、自然が好きなので、自然が好きっていうのをずっと言っていたご縁でいろいろ関係もありまして、環境省つなげよう、支えよう、森里川海プロジェクトのアンバサダー、そして日本環境教育フォーラムの理事も務めさせていただいております。あとは、福島県民プロジェクト大使として、県民、皆で健康になっていこうという取り組み、イベントに参加させていただいたり、JAふくしま未来の野菜果物PR大使として活動していたりして、今はご飯を食べさせていただいている状況です。

長沢 今日は私が自分の話をさせていただけるということで、大学時代の学びが今の自分の考えにどんなふうにつながっているのかということをお話させていただきたいと思います。なので、その話の中で皆さんにちょっとでも共感していただき、ここは自分とは違う考え方だな、こんな考え方もあるのだというのを持ち帰っていただけたら嬉しく思います。あとは一緒に自然のことについて考えるきっかけになったらとも思っています。

私は自然がすごく好きというか、自然にすごく興味があります。なぜ自然に興味を持つようになったかというお話を少しさせていただきます。私は幼少期に福島県の伊達市の田舎で育ちました。家の前が里山で、本当に小さい頃から山の中で毎日、泥んこになって遊ぶような子どもでした。はだしになって、フキノトウを取ったり、水源を探して山の中を歩き回ったりしていました。

その後大学進学と共に上京し、自然が遠くなってしまったように思い始めました。自分の食べているものがいったいどういうものでどこからきているのかが見

えにくくなってしまいました。お肌もすごく荒れました。私はその頃、大根、もやし、白菜などの安い野菜ばかり買っていて、自分の食を見直したいと思うようになりました。そして小さい頃当たり前にあった自然にもう一度立ち返りたいと思ったときに、やっぱり農業だって思いました。そのときちょうど私は空閑先生のゼミに入っていたのですが、そのゼミで持続可能な生活について考え、持続可能な農業というのもキーワードで出てきたので、そのつながりで、私は三重県美杉町というところへ行って農業体験しました。また、埼玉県小川町に行って畑作業のお手伝いもしました。そういった経験の中で、自分の世界観だったり考え方がすごく変わったり、深まっていったなというふうに感じています。

そうしてやはり自然というものが自分の中でのキーワードだなどと強く感じるようになりました。学生時代の体験の中で特に思い出に残っているのが、大学二年の時に、村上真平さんといって三重県的美杉町で自然農を営んでいらっしゃる方の所へ2週間農業体験に行った時のことです。とても豊かで美しい自然の中で2週間、毎日畑に出て過ごしました。そこで手で半日間ずっと汗だくになりながら芋を掘ったりしました。一人で山の麓にある真平さんの建てた作業用の家に住んでいました。朝起きたら床をはいて醤油樽をかき混ぜてお米を炊いてそのご飯を食べながら朝陽を眺める。それらの時間の素晴らしさだったり、あと農業した後には飲む水のおいしさだったりに大きな感動を覚えました。

あとはやっぱり真平さんの地に足の着いた考え方や生き方にとっても感銘を受けました。その中でも印象に残っているのが真平さんの営んでおられる自然農法というものは森をお手本に畑を作るといようなお話でした。簡単に言うと自然の森は何もしなくても豊かな実りがずっと続いていき、そのままですごく土もふかふかだし、理想的な形でずっと豊かな実りが続いていく。それらの自然のシステムをお手本に畑を営んでいくというお話でした。その森の中に何があるのというのを具体的に話してくださったのがこれなのですが、多様性、多層構造、循環。これが森の中にあるよと真平さんはお話してくださいました。

簡単に言うと多様性というのは、皆さんも想像つきやすいと思いますが、森の中で様々な生き物たちが相互に作用しあいながら生態系が保たれているという状態ですね。多層構造というのは、土の団粒構造といって、落ち葉が微生物に分解されることによって、土と土の間に空気がどんどん含まれていき、そのおかげで耕さなくともふかふかで栄養たっぷりの土壌になるということですね。

そして循環。循環も皆さん想像しやすいと思いますが、落ち葉が分解されて栄養たっぷりの土になって、そのおかげでまた豊かな実りがあってそれを動物たちが食べる。またその動物たちも土に返って栄養になってというように命がぐるぐる回っているのが循環ですね。すいません簡単で、でも本当にこの森をお手本にするということが、理想の畑を作ってくれるのだ。森をお手本にすることで豊か

な実りが続く、持続可能な農法が続いていくのだというふうに真平さんはおっしゃっていて、私の中でこの考え方がともしっくりきました。私も小さい頃からよく自然の中にはいろんな学びがあるなど実感していて、悩んだときは自然の中へ行くと本当の自分に戻れるというか、すごくリラックスできて悩みがちっばけに思えたり、悩みに対する解決方法が思い浮かんだりしていました。豊かな生活や命を育むうえで欠かせない学びは自然中に見つけられると考えていました。森をお手本にすれば豊かな実りが続いていく。豊かな畑になっていく。その考えに触れた時に自分の中にあったそれらの思いと結びついてまたはっとしました。

自分にとっての豊かさや幸せは自然をお手本にしたら得られるのではないかという考えが腹落ちした感覚がありました。どういうことかということ、畑の中に、森の循環、多様性、多層構造を取り戻していくように、本当の豊かさを感じながら自然体の自分で生きていきたいなら、自分の中にも多様性、多層構造、循環を取り戻していけばいいのではないかと考えられたのです。

コミュニティなども全て、多様性、多層構造、循環を取り入れたらどうなるのだろうか考えるようになりました。自分の精神や肉体の中での多様性、多層構造、循環ってなんだろうということについても考えました。例えば自分の中の多様性だったら、いろんな人と出会うことであったり、いろんな人の考えを自分の中に取り入れることであったりというふうに思っていて。それはすごく大事なことだになって思っています。ですが、私は大学のときに一度、そういう自然の世界がすごくすてきなと思いきや、都会がすごく生きづらく感じてしまったことがありました。都会は良くない。極端に言えば悪とみなしていました。もう東京は生きていくところじゃないというふうに思ったことがありました。でも知り合いに、裕のそれって多様性を大切にしたいと言っているけれど、東京がすごく嫌い、自然がすごく好きって言っているそれって、本当に多様な？というふうに言われて。

確かに自然が嫌いといって排除してしまっている自分は多様性を持っているとは言えないのではないかと、そこで雷に打たれたような気付きを得ました。そこからは自分がすごく好きな世界があったら、そうじゃない世界は逆に苦手だったり嫌いだったりもすると思うのですが、その両方をちゃんと知って両方の良いところ悪いところも考えていくようにしたら、自分の中で何となくバランスが取れて、多様性というものが生まれていくのではないかなと考えるようになりました。

多層構造というのは、私の中では多様性を持ついろいろなコミュニティに参加することで見えてきたように思います。私は大学の時にサークルに5個ぐらい所属していて、さらには興味があるところにも、どんどん顔を出していたのですが、そのコミュニティごとに自分の人格がちょっと違っていて人格って言っちゃうとちょっと行き過ぎなのですが、そのコミュニティごとに自分の何となく違った顔

があって、それがいったい本当の自分ってどれなのだろうとかとちょっと悩んだこともあったりしました。ですがそうではなくて、そのいろいろなコミュニティをもち、様々な経験をすることだったり、様々な自分がいることだったり、自分の中の多層構造、多様なのだと思うようになりました。土が豊かになるように自分の中にさまざまな階層を持たせることで自分の中にも豊かな土壌が育まれていくように感じられました。

最後に循環というのは、らせん的成長がその一つにあたるのかもしれないと考えています。らせん的成長というのは、同じ間違いをしてしまったたり、どうして自分ってこうなのだろう、なかなか進歩がないなどと思ってしまったたりしていても、実はぐるぐる、らせん的に成長しているということです。間違えても遠回りしても人が生きている限りらせんは続いていきます。そしてその螺旋が後世にも受け継がれていくこと、次世代につながっていくことが循環の一つにあたるのではないかと考えています。

私はこのように、多様性、多層構造、循環というキーワードを大学の学びの中で教えていただいて考えるようになりました。それが今でもすごく生かされているなどと思う瞬間がたくさんあります。例えばコロナで今すごく不安な状態だったり、私も仕事が全然なくなっちゃったりしたのですが、そんなときも多様性、多層構造、循環が自分を豊かにしてくれるだろうという直感があったので空いた時間を使って今まで行けなかったあのコミュニティにせっかくだから参加してみようとか、今まで会えなかった人にも一回会ってみようとか。もちろん不安もあったのですが多様性、多層構造、循環を今こそ深められる、深めていきたいという意味では、いろいろ考える時間になったり、また再び問うて行く時間だったり、自分にとってはすごく豊かな時間を過ごすことができます。

まとまりがなくなってしまいましたが私はこれからも自然の中での気付きや学びを沢山得てそしてその自然の中で学んだものを演技や表現に生かしていきたいというふうに考えています。自然からの学び、そしてそれらを伝えるあらゆる表現手段。この2本柱で、これからも生きていきたいなと思います。自然環境教育だったり、自分が自然の中で学び得たこととか、磨かれた感性を演技だったり表現で生かしていけたらなというふうに考えています。本日はせっかく皆さんにもお会いできたので、皆さんとも自然の中にある豊かさって何だろう。それらを自分にも取り入れていくとしたらどのような感じだろうということも一緒に気づきを得て考えていきたいというふうに今、思っています。すみません。ちょっとまとまりがなくなってしまったのですが、ご清聴ありがとうございました。

【ワークショップ報告】

本会場では、卒業生ゲスト（富吉貴浩さん、長沢裕さん）とワークショップ参加者の方々と議論が交わされた。最初に、卒業生ゲストの方から①自己紹介（大学時代、現在の仕事で何を行なっているか等）、②コロナ禍で仕事を取り巻く環境にはどのような影響が出ているか、③コミ福での学びはどのように活かされているか、について語っていただいた。大学での学びが現在の仕事にもつながっていることや、コロナ禍によって自分の価値観や仕事の考え方についても大きく影響されていることがひしひしと感じ取れることができた。質疑応答の時間では、参加者の方から様々な質問が投げかけられた。ゲストの方が今回ワークショップに参加されるということで、その話を聞きたくて参加された方もおり、ズームの画面越しからもわかるほど熱心に耳を傾けられている様子がうかがえた。講話後は、参加者各々の自己紹介が始まり、ご自身の思い等各々考えられていることも確認ができた。自己紹介の後は、いよいよワークショップが始まった。「コロナ禍で仕事や学業を取り巻く環境にどのような影響が出ているか」をテーマとして、感じたキーワードをズームのチャットで書き込み、キーワードについて議論を深掘りする場面では参加者の方々がどのような思いで、このコロナ禍を過ごされているか、どのように考え方に影響を与えたかといったことが見てとれた。出てきたキーワードによっては、他の参加者からも共感されるようなものもいくつかあり、盛り上がりを見せていた。次のその影響に対して、コミ福での学びはどのように活かされているか」については、さらに深い議論がなされた。書き込まれたキーワードに対して、なぜそのような事に至ったのか、質問も交わされて、学びは、現在の特殊状況下においても自身の強みとして活かされていることを理解できた。対面でのワークショップよりも、ズームでの議論は、発言者により注目が集まり、耳を傾ける場面が多く見られた。出されたキーワードについては、もっと時間を割いて聞いて議論を深めたいと考える意義深いものもあった。まとめの部分では、集約がやや難しいと考えるほど、言葉が出た。参加者の思いが強く感じた場面もあり、効果的な議論がなされ、現在の特殊状況下における生き方の一助となる場となったかと考える。

（坂田 拓朗 2002年コミュニティ福祉学科卒業／まなびあい運営委員）

3) むすび

今回の「まなびあい」は、コロナ禍で、これまでのようにみんなが集って語り合うという「場の共有」はできませんでしたが、オンラインの活用で、参加への物理的ハードルが下がったこともあって新たな参加者層が広がり、参加者数は例年を大きく上回ることができました。

しかし、この参加者の急増は、オンラインにより参加しやすくなったことだけ

がその理由でしょうか？この間オンライン化で参加者数を減らしてしまったイベントも少なくありません。“参加したい”という気持ちが一人ひとりの中で高まらなければ、具体的な参加には至りません。

コロナ禍は、私たちから平穏な日常を奪いました。見えない脅威におびえ、自粛した生活で、文化もスポーツも萎縮しました。そしてなによりも人と人との「ふれあい」が奪われ、人のつながりを基盤とするコミュニティが機能不全となり、そこに集う人々の「顔」が見えなくなりました。

こんなトンネル状況が続いた中での今年の「まなびあい」でした。

こんな状況の中でも何かできるのではないか、こんな時こそ自分の原点に立ち戻りたい、みんながどんなことを考えているのかを知りたい……参加された方の想いは様々ですが、共通するものは、そこに「ふれあい」と「つながり」を求めたということではないでしょうか。その意味で、今回の「まなびあい」は場の共有は提供できませんでしたが、時間と想いを共有する場になったと思います。また、本当に多くの報告者に、その人を語ってもらうことができました。様々な顔があり、それが生き活きと「今」に前向きに取り組んでいる姿に励まされた方は少なくないと思います。

初めてのオンライン実施で不手際がありましたことお詫びさせていただきます。準備する側も、打ち合わせや作業も思うとおりに進められないもどかしさを抱えての当日でした。それでもこうして実施にまで漕ぎ着けたのは、ここで灯を消してはいけない、という多くの方の想いと願いでした。参加された方々の想いをこれまで以上に感じ取れた大会だったと思っています。思いもよらない困難な状況下にもかかわらず実り多い会にいただいた報告者や司会を務められた皆さん、スタッフの方々に感謝申し上げます。

(平野 方紹 2020年度まなびあい運営委員／福祉学科教員)